神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Dante and his Predecessors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1956-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 正巳, Ogawa, M. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2165

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Dante とそれ以前

小川正巳

私は Dante の神曲を読んで，文学作品から未だかって受けたことのない感動を受けた。その感動を仔細に分析してみると大体三つの主要点からなっているようである。第一点は神曲を読みはじめたものなら誰でもが最初に気付く，神曲全体にちりばめられ，神曲という見えざる世界を絶えず視覚世界に転換させるところの「比喩」である。この点については，まだ覚書程度ではあるが，私は雑誌「くろおぺす」10号に書いた。第二点は Purgatorio の XXX, XXXI 歌において最強度にたかまる Beatrice のことである。Beatrice のことは，Dante の処女作 Vita Nuova 以来，彼のいわば原体験ともいうべきもので，神曲の骨組もまたこの原体験によって組たてられている。この点についても，矢張覚書程度にではあるが，「くろおぺす」11号に書いた。第三点は，今こゝで取あっかおうとしている「Dante とそれ以前」である，即ち神曲の形成にそれ以前の如何なる作品が如何なる影響を与えたかを見ることである。

私がこのテーマにかねてから心惹かれていたのは，何も神曲が，それ以前の諸作品の影響で一切説明しつくされると考えたからではない。然し T・S・Eliot も言っているように，Dante や Shakespeare という詩人は，平地に突然ただそのオリジナリティによってそそり立つ山ではなくて，時代的に過去が集約させたいわばアルプス連峯のなかにおいて始めてその偉容が可能な詩人である。Shakespeare 出現の前に既に Elisabeth 朝の詩劇興隆があり，Seneca や Montaigne や Machiavelli の教養があった。Shakespeare はそれらの豊饒な素材にもかかわらず，というよりはそれらの故に彼は偉業をなしとげたのだ。

Dante の場合は，その神曲の素材としなければならなかった素材ももっと大きかった，即ちヨーロッパの古代と中世の一切がそれだったのだ。一言でいえば，ギリシヤ・ローマの文化はローマ帝国の没落とともに，一応ヨーロッパから消えさり，ヨーロッパは暗黒時代（6世紀から11世紀まで）となったが，ヨーロッパはその暗黒時代をくぐって再び一度ヨーロッパから消えさった古代文化を，Lateinisch という名前で，新なるキリスト教精神によって復興さそうとしたのだ。そしてこの復興が文学的には Dante の神曲によって実現されたと言える。従って矢張 T・S・Eliot がその Dante 論(1925)で，「幾度も Dante を読んだ後で，次になすべきことは，それが如何に立派であっても，かれの作品と生涯についての近代の書物よりも，Dante が読んだ書物を読むことであるべきだ」と言っているように，私たちは神曲を正しく理解するために，というよりは神曲の形成が如何に強力なものであるかを理解するためには，私たちは Dante にいたるヨーロッパがたどった歩みを理解する必要がある。そしてそのことは „Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter“ を書いた E・R・Curtius のような該博な知識をもった学者でないと出来ないことだ。即ち古典語のみならず，中世に到るロマンス語も理解出来るだけではなく，この国では容易に見ることの出来ない中世形成期の文献にも眼をとおす必要があろう。従って神曲が与えた感動の第三点をさぐるこの一文は今までの二点に関する文章と較べて，覚書以前のいわばプログラム程度にすぎないものである。

Inferno IV 歌で Virgilius に導かれて Dante は Limbo に到り，Virgilius の紹介で Homerus と Horatius と Ovidius と Lucanus に出会い，彼等によって Dante は第六人目の者として，こゝに la bella scuola（美しい学派）が形成される。ギリシヤの Homerus は当時直接読まれたというよりは，ここでも書かれているように poeta sovrano（至高の詩人）としてローマの四詩人とともに中世の所謂 autores をなしていたわけだ。ローマ滅亡と Dante との間には，あらゆる意味での暗黒時代が存在するにもかかわらず，その暗黒時代をこえて la bella

scuola 形成を要求する Dante の意識のなかには，飽迄彼自身ローマの伝統につながる詩人であるという考えがあったことは見逃せない。だがこゝに問題は二つある。一つはローマ伝統が直接如何にかれに作用したかということ，第二は一度暗黒時代によって消えさった文化が，以上のようなローマ意識によって如何に変質して再興し，Dante に autor の意識をもたすまでに，それ自身の一つの完成をしたかということである。

問題の第一点に関して。中世文化の中心をなしていたものはギリシヤでなくてローマであった事情から，中世文化に根ざすヨーロッパが最高の autor として読んだのは，ギリシヤの Homerus ではなくて，ローマ最高の詩人 Virgilius であった。Dante の Virgilius に対する讃辞は地獄のへき頭で，Dante 自身の口から最高度に述べられている。

"Or se' tu quel Virgilio, e quella fonte,
　　che spande di parlar si largo fiume?"

——

"O deghi altri poeti onore e lume,
　　vagliami il lungo studio e il grande more,
　　che m'ha fatto cercar lo tuo volume,
Tu se' lo mio maestro, e il mio autore;
　　tu se' solo colui, da cui io tolsi
　　lo bello stile, che m'ha fatto onore.

「あゝ　あなたは言葉のかくも豊かな流れを
　　そゝぎだす泉であるヴィルジリオですか」

——

「あゝ　他の詩人たちの誉れであり光であるあなた，
　　私にあなたの書物を研究させた
　　久しい熱意と大きな愛を認めてください。
あなたは私の師であり，私の典拠だ，
　　私に名誉をもたらした美しい文体を
　　私はあなたからのみ学びとった。

Virgilius が更に神曲においては，Purgatorio の頂上地上楽園までの Dante

の道案内であったことを思えば，Dante が神曲制作に如何に多く Virgilius に負うているかは想像に余りある。Virgilius の Aeneid 第6巻の下界入りが Dante の Inferno のモデルとして働いたことも充分想像出来る。そのために私は今 Virgilius を友人たちと輪読している。だから Virgilius のみならず，la bella scuola の他のローマ詩人 Horatius, Ovidius, Lucanus, 更に神曲のもう一人の登場人物としてあらわれてくる Statius, 及び Purg. XXII. において Statius と Virgilus との対話においてふれられる他のローマの詩人たち，即ち Invenalis, Terentus, Caecilius, Plautus, Varro 等の影響は，改めて他日にゆずるとして，幸い Deutsche Dante-Jahrbuch 31./32. Band・Neue Folge 22./23. Band に Hermann Gmelin が「Dante とローマ詩人たち」(Dante und die römische Dichter) を書いているので，この文章がプログラム的性質なものであるだけに，以下その要点をここに記しておこう。

Virgilius。人として。Dante を地獄を通って，地上楽園まで導くことが出来たのは，Virgilius が中世にあっては詩人を超えて，賢者であり魔術師と考えられていたからだ。Beatrice が超自然の代表者であれば，Virgilius は自然界の知慧を代表していたと言える。次に詩人として。Aeneid は先ずその第6巻の下界入りによって，決定的に神曲の Inferno に影響を与えた。（その詩的モチーフの援用は省く）。更に Aeneid は神曲に神話的に，典型的に様々の人物を供給している。（前者の例としては巨人，Centaurus, Harpyiae, Cerberus, Cacus, Minos 等，後者の例としては Dido, Cato, Odysseus, Fabricius, Ripheus 等）。更に Virgilius は神曲の到るところに修辞的名残りをとどめている。

Aeneid V. 213 ff

Qualis spelunca subito commota columba,
Cui domus et dulces latebroso in punice nidi,
Fertur in arva volans plausumque exterrita pennis
Dat tecto ingentem, mox aere lapsa quieto
Radit iter liquidum celeres neque commovet alas.

（そは，例えば一羽の鳩の，已の洞穴より不意に驚かされたるとき，――鳩の家と

いとしき雛とは，多孔質の軽石のうつろにあり——野の方に飛び出でて棲家よりは恐れの為に音高く羽ばたき去れど，やがて穏かなる空をすべり，流るる如くすらりと飛び，翼も多く動かさず，己が巣に立還るにも似て，——田中秀央，木村満三訳）

は，Inf. V. の有名な Paolo と Francesca の箇所において，次のような簡潔な Terza Rime に余韻を見出している。

Quali colombe dal disio chiamate
　Con l'ali aperte e ferme, al dolce nido
　Volan per l'aer dal voler portate……

（欲求で呼ばれ，しっかり開いた翼でもって，
　望みに運ばれて空中を
　甘美な巣にとんでゆく鳩のように，）

Horatius。Dante は彼の Ars poetica と諷刺詩の一部しか知らなかった。Para. XXVI. 137 f は ars poetica に源をもつ。

Ovidius。「彼は Dante にとって Homerus やギリシャ悲劇作家の代用であった，即ち Ovidius は，その魔力が Dante の心をひそかに最も深くしびらしていたギリシャ伝説の細材を与えたのだ」。(Gmelin) 具体的には Ovidius は主にその Metamorphosis で以って，神曲に次の三点で影響を与えた。

1) Inf. XXV. の泥棒圏における，実際のメタモルフォーゼの記述。

2) Purgatorio の全篇に聖書由来のものと交互に用いられている Exampla。(壁画や幻想や精霊の声)。

3) 特別な意味をもつ一連の神話的個々のモチーフ。(例えば Phalaris の牡牛，Athamas, Hecuba, Argus 伝説，Phaeton, Ikarus, Typhoeus, Argo 伝説，黄金時代神話等)。

Lukanus。「彼は中世にとって Virgilius に似て一種の賢者にして魔術師で通っていた。Dante にとっても Lukanus は神曲のなかに登場人物としては永遠化されなかったが，その Pharsalia は，Virgilius 以上に自然科学的，地理学的，天文学的要素及び何よりもスタイルの見本を提供したところの重要な歴史源泉であった」。(前同) 神話的人物としては，Inf. XXXI. の巨人の Antæus, Inf. IX. の魔女の Erichtho, Inf. XX. のエトルリアの予言者 Aruus, 又歴史的人

物及び状況としては，Cato, Purg. VI. の Marcellus 総督，Caesar に関しては Purg. X, Para. XI. の漁師 Amyklas, Rubico 河渡渉をすゝめた Curio 等，更に地理的飛行の着想とスタイル等を Dante は Lukanus に負うている。その他 Dante が Lukanus から奪ったスタイルも指摘されるが，「概して言えることは，Dante は Lukanus から Virgilius 程多くの修辞的名残りを，また Ovidius 程多くのイメージは借りなかった。Dante は Lukanus により多くその修辞的情熱の全体の影響と自由なローマ精神の政治的倫理と，かれの自然及び風景像の偉大さと振幅を負うている」。(前同)

Statius。「Virgilius 同様詩的感謝の気持から登場人物として生命を与えたローマ詩人のなかのもう一人の Dante の寵児 Statius は Limbo の詩人群のなかではなく，Purgatorio においてやっとあらわれてくる，というのは中世伝説は彼を秘密のキリスト教徒として救済にあずからしたからである」。(前同) (Purg. XXI. 参照) Statius の「Thebais は Dante にテーベ伝説において，Dante が彼自身の時代の都市戦争の体験から特に生々と追体験し得たギリシャの歴史と神話の一部を伝えた」。(前同) テーベ伝説のエピソードが比喩として典型として神曲に用いられた場合，Inf. XX. の Amphiaraus, Inf. XVIII., Purg. XXII., XXVII. の Hypsipyle, Inf. XXVI. の Erheokles, Inf. XXXII. の Tydeus 等，神話的モチーフとイメージが用いられた場合，Gigantomachie の神話から Purg. XII. で Briareus が，Inf. XIV. で巨人 Capaneus が，更に Inf. IX に Furien の描写がある等。(なお Dante は Statius の Thebais と Achilleis は知っていたが，Silvae は知らなかった)。

問題の第二点に関して。こゝでは，ローマ詩人たちと Dante は la bella scuola で結ばれはしたものゝ，ローマ詩人と Dante との間には暗黒時代があったのであるから，Dante のなかに流れこんだローマ文学は本来のローマ文学ではなくて，それが何らかの変質をうけているということ，というよりは寧ろ暗黒時代のなかからヨーロッパは nominal にはローマとは言いながらも

実質においては全く違ったローマを創りあげていたこと。つまり Dante を完成者としたところのヨーロッパの新文学が語らねばならない。

中世の詩美の発掘者 Ezra Pound はその著 „The Spirit of Romance“ において「……人は中世紀を，Cassiodorus が，終えん封印された時代の文化をたずさえて Vivaria の僧院に隠とんしたあの世紀の始めをもって日附け得るだろう。Cassiodorus は，彼がその議員であったところのローマ元老院の終えんを見たのだ。かれは Odoacer と Theodoric のもとで高位を得ていたし，Belisarius の最後の勝利を見たのだった」と書いている。

たしかにローマ帝国は蛮族のもとに終えんした。そして終えん後の6世紀から11世紀までを碩学 W・P・Ker はその著 „The Dark Ages“ で扱っている。彼はその序文において次のように書いている。「1100年という日附けは，若し歴史の全過程に epoch と呼ばれるようなものがあるとすれば，その時始ったものに対して mediæval という言葉は疑わしい言葉であるにせよ，epoch である。多かれ少かれ合理的秩序のある二つの時代の間の混乱の期間として暗黒時代が見られる限り，それは実際に11世紀の末に終った。それはゲルマン民族の移動の完成した時であり，ゲルマン的アナキーからキリスト教の統一が生れ，意識的には第一回目の十字軍の企てに実現されたのだ。……

この変化の一つの主要な作因は教義でもなければ政治でもなく，新しい言葉である。11世紀の末に属する大きな歴史的事実は，十字軍のほかに，フランス及びプロヴァンス文学の出現であり，これは近代文学の発端でもある。殆んど何の警告もなく，あらゆる近代詩人を含む最初の派，Guillaume de Poitièrs のリズムはやって来た。近代語で共通に poetry と呼ばれるものゝ一切はどの道その系譜を Guillaume de Poitièrs にたどることであろう」。同じ著者は „Epic and Romance“ において矢張り民族の古い過去に根源をもつ epic（例えばドイツの Nibelungenlied やイギリスの Beowulf やフランスの Chansons de Geste やアイスランドの saga 等）が12世紀においてフランス発生の新文学 Romance に取って代られたことを述べている。

私は今こゝで，中世は何時始まって何時終ったかなどということを問題にするつもりはない。また新文学以前の民族叙事詩をさぐるつもりもない。唯 Dante の神曲が暗黒時代のなかで突然開花したものではないということ，すれば神曲を頂点とする所謂中世の新文学は Dante の前に如何なる歩みをたどったかということが見たいのだ。そしてそのことは既に神曲（のみならず彼の他の著書）にも述べられていることなのだ。

先ず神曲における当時の文学史的状況にふれた個所をひろってみよう。第一はシシリア派の詩人 Bonagiunta da Lucca が Dante と詩を論ずる Purg. XXIV. 49行以下，第二は Bologna の詩人 Guido Guinicelli が Provence の詩人 Arnaut Daniel を紹介する Purg. XXVI. 106行以下が主なるものであろう。

前者の主要点は

Ed io a lui : " Io mi son un che, quando
　　amor mi spira, noto, ed a quel modo
　　che ditta dentro, vo significando."
" O frate, issa veggio, " disse, " il nodo
　　che il Notaro, e Guittone e me ritenne
　　di qua dal dolce stil nuovo ch' i'odo.
Io veggio ben come la vostre penne
　　di retro al dittator sen vanno strette,
　　che delle nostre certo non avvenne.
E quel più a guardar oltre si mette,
　　non vede più dall' uno all' altro stilo."

（そこで私はかれに，「私は，愛が鼓吹するとき，
　　ノートをとり，内らで口授するままに，
　　書きつけてゆくものである」。
「ああ　兄弟よ，今こそわかった」とかれは言った，
　「あの公証人（ノターロ）やギットーネや私を，聞く
　　ところの清新詩派に到らさない結目が。
あなた方の筆が口授者のすぐあとに
　　ついてゆくことがよくわかった，

たしかに私たちには起きなかったことだか。
そしてもっと先まで探そうとするものも
最早夫々のスタイルの違いがわからない。)

つまりこゝでは Dante 並びに Guido Cavalcanti などが形成する所謂 dolce stil nuovo (清新詩派) が，イタリアの他の詩派——こゝでは当のシシリア派の Bonagiunta や Jacopo da Lentino (il Notaro) や Guittone d'Arezzo (その初期はシシリア派と目されていた) ——に対して，いかにまさっているか，更に dolce stil nuovo の詩作の秘密が語られているのだ。

後者の要点は

" O frate," disse, " questi ch' io ti scerno
col dito" (ed additò un spirto innanzi)
" fu miglior fabbro del parlar materno.
Versi d'amore e prose di romanzi
soperchiò tutti, e lascia dir gli stollti
che quel di Lemosi credon ch'avanzi.
A voce più ch'al ver drizzan li volti,
e cosi ferman sua opinione
prima ch'arte o ragion per lor s'ascolti.
Cosi fer molti antichi di Guittone,
di grido in grido pur lui dando pregio,
fin che l'ha vinto il ver con più persone.

(「ああ兄弟よ」とかれは言った,「私が指でさし示す
この者は」(といって前の一人の霊を指さした)
「母語のより巧みな職人であった。
愛の詩とロマンスの散文において
誰よりもまさり，レモーシーの人がまさっていると
思っている馬鹿者たちには言わしておく。
かれらは真理よりも噂に顔をむけ，
かくて芸術や道理が聞かれる前に
かれらの意見をかためる。
このように多くの古人はギットーネになした，

叫びかわしてかれをのみ賞めたたえたが，
遂には真理が多くの人々とともに打まかした。）

こゝでは13世紀のイタリア文学の直接の作因であるProvenceの詩人たちの価値評価が行われているのだ。即ち所謂 trobar clus の詩人 Arnaut Daniel が，当時 troubadours の巨匠といわれていた Guiraut de Bornelh（レモーシーの人）よりも真価があるというのである。未だProvence文学につまびらかでない私としては，そのような評価が正しいものであるかどうかは知ることが出来ないが，少くとも以上の二個所から私たちは Dante 当時の文学状況の一端をうかがい知ることが出来る。

今手許にある Pound の „The Spirit of Romance“ や，George Saintsbury の „The Flourishing of Romance and the Rise of Allegory“ や E. J. Snell の „The Fourteenth Century“ や Curtius 等を参考にして，イタリアの当時の文学状況を，少し整理した形でたどってみよう。

Vita Nuova の Dante やその友 Guido Cavalcanti など Firenze に拠って dolce stil nuova を形成していた。更に Bologna にはこの dolce stil nuovo に少からざる影響を与えた，というよりは F. J. Snell によればその originator であるところの Guido Guinicelli がいた。彼を若し哲学派と称すれば，(The Temple Classics の神曲の註による)，この派には後年の Guittone d'Azezzo が属する。Guittone は，Dante 同様に „nel mezzo del camin“（中道にして）妻子を棄て，聖母マリア騎士僧団に入り，今までの Troubadour 風な詩風を一変させたのだ。従って彼はその前半生においては，先にも述べたように Jacopo da Lentino や Bonagiunta などとともにシシリア派に属していたと言うことが出来る。そしてこのシシリア派こそProvence文学の直輸入によって始まったと言える。ヨーロッパの過去におけるいわば廃線とも言わるべき Provence 文学はそれ自身の価値としては様々に取ざたされてはいるが，14世紀のイタリア文学を発生させた限りにおいては，その意味は重要である。Dante にとっても，以上述べたようなイタリア文学が今日の文学であれば，Provence 文学はいわば昨

日の文学であったろう。それかあらぬか Provence の詩人たちは彼の De Vulgari Eloquentia で扱われているのみならず，神曲においても上に訳出した部分において Arnaut Daniel や Giraut de Bolnelh が出てくるだけでなく，Inf. XXVIII. においては Bertrans de Born が首を提灯のようにぶらさげてあらわれ，また Purg. VI. ではイタリア人でありながら Troubadour であった Sardello が Virgilius と感激的な出会いをしている。Guillame de Portièrs (1086–1127) に始まり，Giraut Riquier (1234–1292) を最後として一世紀にわたって続いた Troubadours 文学も Anjou 家と教皇 Innocent III による Albigeois 十字軍によって弾圧をうけ，当時ヨーロッパ随一の文化擁護者 Friedrich II の支配するシシリア島に移動したのだ。そしてこのシシリアに蒔かれた種は，Staufen 家の崩壊とともに，次第に南から中部イタリアを経て北上し，遂に Toscana の dolce stil nuova に完成したわけだ。ひたすら技巧的に恋愛を歌った Troubadour の詩が，シシリアから北上して Toscana に結実するまでに如何なる変質をとげたかということは，この際非常に重要な問題ではあるが，この文章の性質上，以下 Pound の上述の本の „Lingua Toscana“ という章から，簡にして要を得た次の言葉を記しておこう。「Troubadours の芸術は Bologna の哲学に出会い，抒情詩の新時代が始まったのだ」。「Provence の歌の直截さはこゝで失われてしまった。introactive な関係文章をもった複雑なシステムは，謂わばラテン語で詩を読むことほど，詩を聞くことには慣れていない者によって設定されたのだった」。思えば Vita Nuova から神曲に執拗に追求される Beatrice，古来様々に論議されて来た Beatrice の問題もまた，この変質に深いつながりをもっているはずだ。即ち Dante の Beatrice の扱い方を正しく理解するためには，当然 Troubadour の愛が如何に Toscana に到るまでに変質したかを正しく理解する必要があろう。

ヨーロッパの6世紀以来の久しい暗黒時代からまず眼ざめたのはフランスだった。George Saintsbury は1100年におけるヨーロッパ文学の状況を次の如くに述べている。「英国においては，Anglo-Saxon は実際に死滅していない

とすれば死につゝあった，そして一世紀以上もの間最早著しく文学的魅力のあるものを生み出すことをやめていた，そして英語は，最も早い "middle" Englishすら殆んど生れていず，文学的用途への条件は未だしであった。より古くよりオリジナルな Iceland の文学の最後の余韻は死にたえつゝあったし，Icelandic の散文の偉大な産物，Saga はまだ，はっきりした文学的形態をとらずに，volitat per ora virum（人々の口の端にたゞよっていた）。スペイン語乃至イタリア語と本来呼ばるべきものが，一体存在していたかどうかは最高度に不慥なことで——もしあったとしても，やがてスペイン語とイタリア語になるべき徴候を示す lingua rustica の方言にすぎなかった。ドイツ語はある程度，英語と同じ「古」と「中」の状態の間の夢現（トランス）であった。ただフランスにおいてのみ，フランス語の二つの大きな分割のなかにおいてのみ，国語文学は活気を呈していた。北方語なる langue d'oïl は——実際に知られた存在において，又はそれが存在したという尤もな推論によって——民族叙事詩即ち chanson de geste を示し，南方語なる langue d'oc は Provence 抒情詩を与えた」。langue d'oil による chanson de geste がやがて romance に追われることは W. P. Ker の „Epic and Romance" の説くところであり，更にこのヨーロッパの新文学，即ち langue d'oil の romance と langue d'oc の Troubadours 文学とが，ヨーロッパの諸民族の過去に根源をもつ民族叙事詩から生れたものでないこともまた Ker の力説するところである。すればそれら新文学の発生を促したものは何か。Curtiusによれば，それはラテン文学の研究であるということだ。die lateinische Renaissance des 12. Jahrhunderts。暗黒時代にラテン文化は僧院のなかに，命脈を保ってきた。ラテン文化は僧侶の所有となった。久しくインテリは僧侶だけであった。 Paris は学問の中心地であった。寺に収容し切れないインテリは，あふれて文学に赴いた。フランスに新文学がまず発生した理由だ。Curtius はその事情をこう書いている。「11, 12, 13世紀におけるフランス文学の豊かな発展は従って，フランス及びフランス的イギリスに花さいた当時のラテン文学と緊密な関係がある。ラテン的教養と文学が先行し，

フランスのそれが従う。ラテン語はフランス語の舌を解いたのだ。フランスは studium の荷い手であったので，即ち文法と修辞学を先頭にした artes がそこに本拠をもったので――その故にそこに先ず自国語文学の花が咲いたのだ」。1100年から1275年までフランス文学は，ヨーロッパの他の国の文学の模範であった。やがてそれが深くイタリアに吸収されて，Italianismo となって，今度は逆にヨーロッパの他の諸国にはねかえるまでは。

要するに Dante を一つの完成とするところのヨーロッパの新文学は，暗黒時代をへだてゝローマ文化と全く無縁のものではなかったのだ。ローマの伝説は暗黒時代をくぐって，変質しながらも，Dante において新なる統一を見出したのだ。神曲が私たちを感動さす所以の一つは，神曲がそのような膨大な伝統の統一体であるところにある。

なおこの問題が限りなく私の心を惹きつけるのは，西洋文明という異質の文明によって，伝統を絶ち切られたこの国が，その異質の文明によって変質されながらも，新たに世界的に如何なる統一体を形成し得るかという課題に，(就中文学表現の立場から)，暗示的であるからだ。そしてそのような暗示は，更にこの国の文学表現の問題をこえて，世界的に近代文学が崩壊して，暗黒時代に入った今，20世紀新文学形成の行手にも力強く働きかけてくるものではないか，と私は考える 。